

効果的な「海外留学研修」プログラムの 開発に関する一考察

A Study for Developing an Effective Study-Abroad Program

池田伸子
IKEDA Nobuko



Key words:

海外留学研修、外国語能力、異文化適応能力、人間的成長、
カリキュラムデザイン

study abroad, foreign language proficiency, intercultural competence,
personal development, curriculum design

Abstract

Globalization is a term that consistently appears in discussions of educational in these days. In this globalized, interconnected world, personal development is as vital as foreign language competence and intercultural competence. So, the numbers of study abroad programs (SAP) created as a means for developing such competence offered by colleges and universities has grown consistently over the past decade. And in addition to their educational goals, these programs serve as a recruitment tool for prospective students. SAPs are delivered in very different formats and often with substantially different objectives, so it is very important to set clear objectives and to design the most appropriate format for our students. To develop an effective SAP, it is very important to connect students' SAP experience with study in pre-SAP and post-SAP courses. Because, through well-designed and sequenced pre-SAP, SAP, and post-SAP programs, it is possible to develop students' foreign language competence, intercultural competence, and personal qualities. As educators, we have the responsibility to develop and offer an effective and appropriate study abroad program to help our students become competent, sensitive global citizens and professionals.

1. はじめに

近年、「グローバル人材」という言葉が、様々なメディアに取り上げられている。少子高齢化が進み、これから人口減少社会に突き進んでいく日本が経済的に発展し続けていくためには、厳しい国際社会で通用する「グローバルな」人材が必要らしい。確かに、日本国内のマーケットが縮小していくなかで、海外のマーケットに進出しなければならない企業にとって、グローバル化は深刻な問題であろう。企業が高い外国語能力とビジネススキルを備えた人材を確保しようと考えるのは、当然のことだと思う。そして、そのような企業のニーズを受けて、様々な企業や学校が、企業向けのグローバル人材育成プログラムを企画し、グローバル人材育成を請け負っている。

このような時代の流れを受け、大学に対しても「グローバル人材を育成せよ」という要求が突きつけられている。大学が独自でいろいろと工夫して、世界に通用する人材を育てなさいということである。結果、多くの大学が、英語で展開する授業を増やしたり、積極的に学生を海外に留学させたり、海外でインターンシップに参加させるプログラムを開発したりなど、独自のグローバル人材育成に努めている。

こうして、今や、企業においても大学においても「グローバル人材育成プログラム」が展開されているのだが、そのほとんどのプログラムにおいて、グローバル人材を育成するための手段として「留学」が取り入れられている。グローバル人材は国際社会で活躍できる人材なのだから、グローバル人材を育成するためには、まず内向き志向の若者を海外に送り出し、国際社会を経験させる必要があるということだろう。

立教大学の異文化コミュニケーション学部においても、2008年の開設当初からカリキュラムの柱の1つとして2年次後期に「海外留学研修」という半期の留学科目を原則としてすべての学生に課している。もちろん、シラバスのどこにも「グローバル人材」という用語はなく、その科目の目的としては、外国語の運用能力の向上と異文化対応能力の養成と記されているのみである。しかし、前述したように、留学がグローバル人材育成の手段であり得るのなら、「海外留学研修」もまた、グローバル人材育成の手段として機能できることになる。だとすれば、異文化コミュニケーション学部もまた、グローバル人材育成を目的とした学部だと言えるのだろうか。

この疑問に対する答を見つけるために、本稿ではまず主として政府がまとめた文献から、政府の考える「グローバル人材」とはどのような人材なのかを明らかにする。そして、その上で異文化コミュニケーション学部が育成しようとしている人材像、学習成果等を概観し、異文化コミュニケーション学部が育成しようとしている人材は「グローバル人材」と呼べるのかを考察する。さらに、その上で、「留学」がグローバル人材育成にとって効果的プログラムなのかについて先行研究をもとに分析することにより、異文化コミュニケーション学部が展開すべき「海外留学研修」のデザインについて提案する。

2. 「グローバル人材」とはどのような人材か

2. 1. 様々な文献の中の「グローバル人材」の定義

これまで、様々な文献において「グローバル人材」とはどのような人材かについて述べられている。ここでは、主に政府がまとめた文献の中のグローバル人材像を提示することで、今、社会に求められているグローバル人材とはどのような人材なのかを明らかにする。

首相官邸編「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」(2011年6月22日)

「豊かな語学力・コミュニケーション能力や異文化体験を身につけ、国際的に活躍できる『グローバル人材』を継続的に育てていかなければいけない」としたうえで、グローバル人材とは、「要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力」、「要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」、「要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」を備えた人材であると記している。さらに、「グローバル人材」に限らずこれからの社会の中核を支える人材に共通して求められる資質として、「幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと(異質な者の集団をまとめる)リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等」を挙げている。

経済産業省・文部科学省編「産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会報告書」(2010年4月23日)

グローバル人材とは、グローバル化が進展している世界の中で、主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドをもつ同僚、取引先、顧客等に自分の考えを分かりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、更にはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材。

グローバル人材に共通して求められる能力として、①「社会人基礎力(前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力)、柔軟性、状況把握力、創造力、発信力、傾聴力」、②「外国語でのコミュニケーション能力」、③「異文化理解力・活用力」、④「基礎学力」、⑤「専門知識」、⑥「人間性、基本的な生活習慣」を挙げている。

文部科学省 産学連携によるグローバル人材育成推進会議「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」(2011年4月28日)

世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能

力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間。

厚生労働省「雇用政策研究会報告書」（2012年8月）

急激にグローバル経済の進展する中、海外事業所勤務の場合は勿論、国内勤務の場合であっても、海外企業等との関係は避けて通れない場合が多いことから、勤務地に関係なく、グローバルな視点をもって仕事をして、成果を出すことのできる人材。

こうして、主要な省庁や政府がまとめた定義を見ると、毎日のように使われている「グローバル人材」の定義は様々だが、求められる要素をまとめると、「言語（日本語、外国語）能力」、「コミュニケーション能力」、「日本人としてのアイデンティティ」、「異文化理解、異文化コミュニケーション能力」、「社会人基礎力、主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、状況把握力、創造力、発信力、傾聴力、基本的な生活習慣等の人間力」、「基礎学力や専門知識等の知識」であることがわかる。一般的には、「企業や社会のグローバル化に対応できる人材」、「外国語（主には英語）を駆使して高度な業務がこなせる人」という意味で用いられる「グローバル人材」だが、外国語能力以上の能力やスキル、人間力までを含んだ実にレベルの高い「人材」なのである。

2. 2. 異文化コミュニケーション学部が育成しようとする人材

立教大学異文化コミュニケーション学部では「高度な言語能力とともに幅広い知識と国際的教養を備え、複眼的な視点から多文化共生社会の進展に貢献できる人材を育成する」ことを目的としている。また、教育の柱として、「複数の外国語能力の養成」、「日本語や日本文化への理解と認識を深める」、「言語をめぐる文化や社会について学ぶ」、「異文化に触れる機会としての海外留学研修」などを挙げ、学習成果として、次の4点を示している。

①論理的に思考し、的確に自己を表現することができる。②自己客観化と他者理解に基づくコミュニケーションができる。③ふたつの外国語でコミュニケーションすることができる。ひとつの外国語については高度の言語運用を行うことができる。もうひとつの外国語については日常レベルで通用する言語運用を行うことができる。④言語について、そして言語の背後にある文化や地域について幅広い知識と教養を有し、それを活用しつつ、自ら問題を発見し、解決する能力をもって異文化コミュニケーションの現場で指導的な役割を担うことができる。

これを政府や省庁が考えている「グローバル人材像」と比較してみると、「言語（日本語、外国語）能力」、「コミュニケーション能力」、「日本人としてのアイデンティティ」、「異文化理解、異文化コミュニケーション能力」については重なっているし、学習成果として学部が求める「専門知識」についても示しているが、「人間力」についてはあまり具体的に明示していないことがわかる。

しかし、「多文化共生社会の進展に貢献できる人材」の育成を目指し、「自ら問題を発見し解決

する能力をもって異文化コミュニケーションの現場で指導的な役割を担う」能力を学習成果として示していることから、異文化コミュニケーション学部においても「発信力、傾聴力、社会人基礎力、主体性、協調性・柔軟性、責任感、状況把握力等の人間力」を備えた人材の育成を目指していることが読み取れる。

省庁の定義するグローバル人材像の文言には、「グローバル経済、海外企業等との関係、世界的な競争、同僚、取引先、顧客」など、「ビジネス」を連想させるものが少なくないため、「グローバル人材＝国際ビジネスの舞台活躍できる、高度な英語力と高度なビジネススキルを持った、バリバリのビジネスマン」というイメージが強く、異文化コミュニケーション学部が育成を目指す人材と「グローバル人材」とを重ねて考えることが難しかったが、ビジネス色を除いて考えれば、異文化コミュニケーション学部では、2008年の開設当初から「グローバル人材」の育成を目指してきたと言えるのではないだろうか。

3. 留学プログラムの効果

3. 1. 先行研究

3. 1. 1. 外国語習得と留学

多くの研究者が、海外留学が学習言語の能力にどのような影響を与えるのかについて研究している。Carroll (1967) は、多くのアメリカの大学生に調査を実施し、どんな留学であってもそれは学習言語の能力にプラスの影響を与えると述べている。また、Lafford (1995)、Lafford & Collentine (2006) は、海外留学は学習言語の語彙の習得を早め、発話の流暢さを高め、聞く・話す能力の向上に貢献することを示している。

日本人英語学習について言及している研究としては、小林 (1999)、田浦他 (2009)、上斗 (1989)、沼本他 (1990)、沼本他 (1991)、野中 (2001、2002、2005)、Kitao (1993) などがあり、向上が見られる能力 (聴解、語彙、文法、読解等) にはばらつきがみられるものの、留学のプラスの効果が報告されている。

また、渡航時の英語能力と留学による能力変化の度合いとの関係について明らかにしようとしている研究も見られたが、その結果については、沼本他 (1990) では成績上位群の聴解力のほうが下位群よりも有意に向上したと報告されているのに対して、野中 (2005) では、逆の結果が報告されているなど、まだ信頼性の高い結論は導き出されていない。

留学によって習得が促進される能力の明確化、成績上位群、下位群に対する効果など、まだ明らかにされていない点があること、あまり効果がない能力も存在するという結果 (木村、2006; Lafford & Collentine、2006)、また、渡航時の言語能力や滞在期間が外国語能力の向上に影響を与える可能性の指摘 (Isabelli & Nishida、2005) など、今後、明らかにすべきことは多いが、海外留学が学習言語の能力向上にプラスの影響を与える可能性は非常に高いといえよう。

3. 1. 2. 異文化理解、異文化感受性、異文化リテラシーと留学

異文化コミュニケーションを円滑に行うためには、異文化コミュニケーション能力 (Koester et al, 1993; Martin, 1993)、異文化適応能力¹⁾ (Ruben, 1989; 山岸, 1995)、異文化リテラシー (山岸, 1997) 等の能力が必要であり、これらの能力を構成する要素の1つに異文化感受性が挙げられる。異文化適応能力は多くの要素から構成されており、Deardorff (2008) はその例として「他者の世界観への理解」「自己の文化を意識する能力および自己を評価できる能力」「傾聴と観察をするスキル」など20以上もの要素を挙げている²⁾。

海外留学が異文化適応能力や異文化コミュニケーション能力にどのような影響を与えるかについても、近年、多くの研究者が調査を実施している。そして、その多くが、「滞在国および滞在国内へのイメージの改善」「国外での異文化体験を通じて日本人としての意識を再確認する」など、肯定的な変化について述べている (徳井、2002; Chen & Isa 2003、Chieffo and Griffiths、2004; Fuller、2007; Clarke, Flaherty, Wright, and McMillen、2009; Paige et al.、2004; Engle and Engle、2004; Anderson, Lawton, Rexeisen and Hubbard、2006; Paige, Cohen, and Shively、2004; Patterson、2006; Williams、2005)。

しかし、これらの先行研究で用いられた調査方法は、アンケート調査用紙を用いたもの、特定の測定道具を用いたものなどさまざまであり、また、事前・事後の変化を比較しているものとそうでないものも混在している。

異文化適応能力や異文化感受性を測定する道具としては、Intercultural Development Inventory (IDI) (Hammer and Bennett, 2002)、Global Perspective Inventory (GPI) (Braskamp et al., 2010)、Intercultural Sensitivity Index (ISI) (Olson & Kroeger, 2001) などがよく用いられている。これらはすべて異文化適応能力を測定するための道具として開発されたものであるが、基礎とする理論や測ろうとする (測っている) 能力やスキルはそれぞれに異なっている。「異文化適応能力」がどのように変化したかを明らかにする際には、具体的にどのような能力あるいはスキルにおいて変化が見られたのかに留意する必要がある。

また、漫然と異文化に触れるだけでは必ずしも異文化適応能力は育たない (Kelly, 1963; Bennett, 2008) ため、異文化適応能力を向上させるためには、留学プログラムに意図的に教育的介入をする必要があり (Pedersen, 2009)、留学で異文化適応能力を身につけることができるかどうかは、学生の外国語能力、留学期間、留学前・中・後の異文化トレーニングの有無や内容によって大きく異なる (Bennett, 2008; Cushner & Karim 2004; Hoff, 2008) という先行研究からは、留学前の事前プログラム、留学中の介入、留学後のプログラムが重要であり、海外留学は大学でのカリキュラムにきちんと組み込まれたものであるべき (Brubaker 2007) だということを示唆している。

3. 1. 3. 社会人基礎力 (人間力) と留学

足立 (2010) は、Chickering and Reisser (1993) の Student Development Theory³⁾ を参考に Evans (2003) が作成した項目に留学のケースを加えたリストを作成し、留学による人間的成

長についての枠組みを次のように提示し、留学が人間力を育成できるという可能性を示唆している。

(1) 能力開発 (Developing Competence)

知的能力、身体能力、手先の能力、対人能力の開発。これらの領域での自信。

留学の場合：留学先で身につける学問分野の知識、外国語コミュニケーション能力、異文化コミュニケーション能力

(2) 感情抑制 (Managing Emotions)

自己の感情に気付きそれを受け入れる能力、感情表現を適切に行いコントロールする能力。
(鬱、怒り、自責心、愛情、楽天的思考、幸福等)

留学の場合：カルチャーショックからくる鬱や怒りの感情などを客観的に捉え、分析し、それを克服する力。

(3) 自律を通して達成する自立 (Moving Through Autonomy Toward Independence)

精神的な独立、自己指向、問題解決能力、粘り強さ、機動力を身につけるとともに自立の重要性を認識し受け入れる。

留学の場合：日常生活（食事、健康、安全、起床等）の自律的管理力。言葉の壁や文化や習慣の違いの中で自分の問題を自分で解決していくたくましさや行動力。

(4) 成熟した対人関係の確立 (Developing Mature Interpersonal Relationships)

互いの違いを理解し受け入れる能力。健全で持続的な親愛関係を構築する力。

留学の場合：互いの価値観等の違いを尊重し合い受け入れる能力。他者との違いを冷静に受け止め、寛容に受け入れる力。自国の人間のみならず他の文化の人間とも健全で持続的な対人関係を築ける力。

(5) アイデンティティの確立 (Establishing Identity)

自己の身体や容姿、性別・性的指向、社会的・文化的バックグラウンド、明確な自己像・自己の役割と生活様式、安定した自己意識、自己容認と自尊心、自己の安定と統合について、肯定的に受け止める力。

留学の場合：自分と異なる人々の中に身を置くことによる、自己の特徴がより明らかになるため、自己の文化・民族的アイデンティティの確立。

(6) 目的の確立 (Developing Purpose)

職業に対する明確な目的をたてる。自己の興味の対象や参加する活動に対して積極的にかかわれ、対人関係にも強くかかわっていく力。

留学の場合：自己の興味の対象、自分がしたいこと、できることに対する意識の明確化。自己の可能性への気づき。

(7) 人格・価値観の統合 (Developing Integrity)

画一的で厳格な価値判断から、人間味があり、個人を重んじる価値判断へと移行し、他者の信条・信念を認め、尊重できる力。価値観と行動の一致。

留学の場合：他の文化にもとづく信条・信念、価値観を受け入れられる人間的「うつわ」を持ちつつ、自己の価値観と人格を確立する力。

また、小林（2013）は、韓国での短期留学を経験した学生6名の報告書の記述を分析し、留学によって、「生じた困難に対して個々人が工夫をしながら学習したり、アイデアを友人間でシェアする」「学習に関する刺激やモチベーションの向上」「歴史に関する問題意識の喚起」「学生自らが問題を発見し、主体性をもって問題解決に向けて適切な相手と交渉し、実際に問題を解決していく力＝社会人基礎力」などが向上したと述べている。

しかし、いずれも「可能性」あるいは「報告書の記述から読み取れること」による言及にとどまっており、また、本国のキャンパスにおける学びと比較されたものでもないため、学生個々人の主観、印象という枠にとどまっている。

3. 2. 考察

3.1では、外国語習得、異文化適応能力、人間力に対して、海外留学がどのような影響を与えるのかについての先行研究を概観した。個々の研究においては、それぞれ有意義な報告がなされているが、多くの研究は留学の教育的効果を一面的、部分的にとらえており、包括的かつ具体的に検証しているものが少ないため、どのような効果があったかを報告するにとどまっており、留学の教育的効果を高めるための方法が必ずしも十分に検討されていない。また、留学の肯定的効果のみに焦点を当てて論が展開されているものが多く（工藤、2009）、カルチャーショックや事故などのリスクについてあまり深く検討がなされていない。

内閣府が実施している青年国際交流事業の効果に関する報告書では、「異文化への対応力」「リーダーシップ」「他者・多文化間における調整力」「集団生活への適応力」「日本人としてのアイデンティティ」「責任感・使命感」「社会貢献活動への取り組み」において、交流事業に参加した学生の評価が留学よりもかなり高いことが報告されている（内閣府 2012年）。青年国際交流事業では、参加学生がいろいろな国の学生と世界的な共通課題についてディスカッションしたり、自国文化を紹介したり、産業・文化・教育施設の視察や担当者との意見交換をするなどの活動が組み込まれている。このことから、ただ海外に留学するだけでは不十分であり、学生が主体的に関わる活動、学生にとってインパクトの大きい活動などを組み込む必要があることがわかる。

さらに、渡航前の聴解能力が高いほど、外国人への接近および受容的態度の度合いが高くなる傾向がある（沼本他 1991）、不安や緊張感、個人的な期待外れ、人種や性差別といった自分にとって文化的に重要な問題を受け入れ家庭との日々の生活の中で感じると、そのことが外国語能力の習得にも影響を与える（Lafford & Collentine 2006）という結果もあることから、留学前の学生状況の把握、事前の研修なども重要であることがわかる。

つまり、海外留学はグローバル人材の育成のための万能の道具ではなく、海外留学を効果的に活用するためには、事前・留学中・事後と継続したプログラムのデザイン、事前・事後の学生状況の詳細な把握、留学中の効果的な教育介入の実施など、考えなければならない、実行しなければ

ばならない項目は数多いのである。

4. 「海外留学研修」科目の改善に向けて

「海外留学研修」に参加した学生の多くは、「自立心が育った」「習慣や考え方の違う人と柔軟につきあえるようになった」「自分が日本人であることを自覚した」「自分が日本について何も知らないことに気づいた」など、異文化体験を通しての学びや個人の成長を語ることが多い。しかし、「海外留学研修」では、その部分（多くは人間力）を成長させるためのプログラムの部分が弱く、学生の気づきや意識がその後の学びにうまく結びついていない。

効果的に「海外留学演習」を実施するためには、まずその科目が学部カリキュラムにしっかりと位置付けられた科目であることを再認識する必要がある。カリキュラムに組み込まれた留学は、基本的には本国のキャンパスでの教育では達成が困難なものを海外のキャンパスにおいて行うものである（Lamet & Bolen, 2005）。したがって、「海外留学研修」の内容と本国のキャンパスで展開する教育内容との間には一貫性がなければならない。まず、「海外留学研修」の学習目標、到達目標を事前に明らかにし、事前研修において学習のための方向付けを行い、十分な予備知識や分析・内省のための道具やスキルを与えておく必要があるのである。

また、事前研修で重要なことは、予想できない問題とその解決に対して学生の問題意識を喚起することである。海外で起こりうる様々な問題や困難を学生に想定させ、それらへの創造的な解決策を考え、事前にシミュレーションさせるなどの活動が必要なのだ。海外で生活することには、様々なリスクが伴う。実際に困難や問題にぶつかったとき、どのようにその困難を和らげるのかについても、具体的に事前研修で学習、体験できる機会を提供することが重要なのである⁴⁾。

また、母語ではない言語でのコミュニケーションに対する不安から、「日本人」と「外国人」の差異をウチとソトの二項対立でとらえることは、偏見や不寛容、解決困難な衝突につながりやすい（Holliday, 2011; Kudo et al., 2011）。学生がこのような状況に陥ることのないよう、事前研修でストレスコントロール、文化の多様性などについて学ぶことも重要である。小林（2013）は、発信力、傾聴力、ストレスコントロール力については、学生の留学後の報告書に関連する学びが見られなかったと述べている。発信力や傾聴力は本国のキャンパスでの学びの中でも意識させることは十分可能だが、ストレスコントロールについては、本国だけではなく、やはり海外という環境の中でその力を身につけさせる必要がある。この点についても、事前研修で学生に意識させ、また、コントロールの方法やスキルなどについて考えさせるような取組が必要であると思われる。

次に留学中においては、SNSなどを通じて常に教育的介入を行う必要がある。日々のできごとを学生が振り返り、言語化し、それと向き合う機会を提供するための介入を行うことで、学生が経験を内在化することが可能になっていくからである。また、留学中においては、学生が積極的に関わられるような活動、インパクトのある活動を意図的にプログラムに組み込んでいくことも重要だが、「海外留学研修」の場合、海外の大学で展開されるプログラムに介入することは難しく、

この点についてはさらに工夫が必要である。

事後研修においては、学生が自らの経験を他者との対話を通して「内省」する機会を提供することが重要である。異文化理解や異文化適応能力を促進するうえで重要なのは、経験事自体ではなく、異質性や他者性を意識したなかで自らの経験を分析し、行動につなげる力である (Alred, Byram, & Fleming, 2003)。その力を伸ばす仕掛けづくり、プログラムデザインこそが、重要なのである。

また、「海外留学研修」は学部カリキュラムの中に位置づけられていることから、学部では非常にきめ細やかなサポートシステムを構築している。各種のオリエンテーション、個別面談、危機管理システム、ビザの手続きなど、学生は入学時から帰国するまで、学部の実に手厚いサポートを受けて「海外留学演習」に参加している。学部カリキュラムである以上、学部で手厚いサポート体制を構築することは必要不可欠であるが、そのサポートへの過度の期待と現実とのギャップからくる失望感や、過剰なサポートの提供による自尊心・自己肯定感・問題解決能力の低下など否定的側面が出る可能性にも配慮が必要なのではないだろうか。確かに海外留学には否定的効果も伴う。留学中の病気やけが、自己、人間関係上のトラブルなどのリスク。言語教育や異文化接触を通じた偏狭なナショナリズムの高揚という異文化理解の落とし穴 (馬淵, 2010; 工藤, 2011) にも注意する必要がある。大切なのは、これらのリスクを回避すべきものと決めつけるのではなく、学生の成長の契機にするためのプログラムをデザインすることなのではないだろうか。

今後は、サポートシステムまで広く含みこんで「海外留学研修」をデザインすることにより、異文化体験や人間的成長について、学生が個人的なエピソードのレベルでその価値が語られるにすぎない現状を改善し、それをきちんと評価できるしくみ、意識的にそれらを伸ばすカリキュラム、プログラムデザインが必要なのである。

5. 終わりに

現在、大学は、ただ知識を与える—「受動的な知」を与えることよりも、既存の情報や知識をもといて自ら新しい問題をたてたり、課題を発見し、知識を構築し、発信していくという「能動的な知」を備えた人材を育成することが求められている (苅屋, 1998; 小林, 1998)。そして、「能動的な知」を備えた「グローバル人材」の育成にとって、やはり「留学：海外留学研修」は非常に有効なカリキュラムである。今後も、効果的に「海外留学研修」を実施していくためにも、常にカリキュラムの改善を行い、また、同時に学生の能力の客観的測定も実施していく必要がある。その際、異文化コミュニケーション力、異文化適応能力、異文化感受性等を側的する道具には様々なものがあり、それぞれに測定しようとする項目、ポイントが異なるため、効果の測定にあたっては、まず「海外留学研修」の学習目標を明確にし、その目標を構成する下位の項目を絞り込んだうえで、それらを測定するのに適した道具を選ぶことが重要である。

また、英語圏以外の言語圏で「海外留学研修」を履修する学生のためには、英語だけではなく、

仏語、西語、独語、中国語、朝鮮語能力の伸びと留学の影響との関連はどうなのかについても先行研究を調査し、また学部においても調査分析を実施していく必要がある。

海外大学で展開されるプログラムの点については、今後も調査、改善が必要である。現在、英語力が一定レベル以上ある学生は、「海外留学研修」においても、学部の専門科目を現地の学生と一緒に学べるアカデミックコース、企業でのインターンシップに参加できるコースを選択することができ、また、学部間交流大学のサンディエゴ州立大学やリュブリャナ大学では日本企業でのインターンシップ、日本語教員としての経験などを積むことが可能である。しかし、英語力がそのレベルに達していない学生や、英語以外の言語圏を選択する学生に対しては、多様なプログラムを提供できていない。さらに、学部間交流の大学とであれば、こちらから留学期間中の特別なプログラムについて提案し、その実現に向けて交渉することが可能であるのに対して、それ以外の多くの大学で展開されるプログラムに関しては、こちらから相手の大学で展開されるプログラムに提案したり意見を伝えたりすることができない。今後、学部間交流協定を結ぶ大学数をさらに増やし、英語以外の言語圏の協定先も確保していくことで、学生にとって効果の高いプログラム内容を相手先に提案していくことが重要であると思われる。

注

- 1) Intercultural Competence については「異文化間能力」「異文化適応能力」など様々な和訳があるが、本稿では「異文化適応能力」を用いる。
- 2) Deardorff (2008) が異文化適応能力の構成要素として例示している要素
他者の世界観への理解、自己の文化を意識する能力および自己を評価できる能力、新しい文化環境への適応力、傾聴と観察をするスキル、異文化学習に対する開放性と他文化の人々への寛容性、異なるコミュニケーションスタイルや学習スタイルへの適応能力、柔軟性、分析、解釈、関連付ける力、曖昧さ・不明確さへの寛容性、自己と他者の文化に対する深い理解、他文化に対する尊敬の念、文化間での共感力、文化的多様性の価値を理解する力、文化の役割と影響力および場面的、社会的、歴史的コンテクストの影響力への理解、認知的柔軟性—エティック (etic) 的視点からイーミック (emic) 的視点 (またはその逆) へ自在にスイッチできる柔軟さ、社会言語学的能力、常に物事に注意を向けている姿勢、判断の保留、好奇心と発見、交流を通しての学び、民族相対的なものの見方、特定文化の知識・相手文化の伝統に対する理解 (Deardorff, 2008, p.34)
- 3) アメリカの大学教育における学部生の成長を分類・説明するための理論の1つ。
- 4) 異文化接触に伴う困難を和らげる有効な方法として、同じ大学からの学生との接触、様々な人との心地よい経験の共有、自他の受容的行動、自己の意欲的行動を挙げている (工藤 2009)。

参考文献

- 足立恭則 (2010) 「大学学部課程における海外留学の教育的価値とカリキュラムにおける位置づけ」、東洋英和女学院大学『人文・社会科学論集』第28号、pp.77-91。

- Alred, G., Byram, M., & Fleming, M. (2003). Introduction. In G. Alred., M. Byram. & M. Fleming (Eds.), *Intercultural experience and education* (pp. 1-13). Clevedon: Multilingual Matters.
- Anderson, P. H., Lawton, L., Rexeisen, R. J., and Hubbard, A. C. (2006). Short-Term Study Abroad and Intercultural Sensitivity: A Pilot Study, *International Journal of Intercultural Relations*, 30 (4), 457-469.
- Bennett, J. (2008). On Becoming a Global Soul: A Path to Engagement During Study Abroad. In V. Savicki (Ed.), *Developing Intercultural Competence and Transformation* (pp.13-31). Sterling: Stylus Publishing.
- Braskamp, L. A., Braskamp, D. C., Merrill, K. C. & Engberg, M (2010). *Global Perspective Inventory*. Retrieved September 1, 2010, from <http://gpi.central.edu/supportDocs/manual.pdf>
- Brubaker, C. (2007). Six weeks in the Eifel: A case for culture learning during short-term study abroad. *Unterrichtspraxis/Teaching German*, 40 (2), 118-123.
- Carroll, J. B. (1967). Foreign language proficiency levels attained by language majors near graduation from college. *Foreign Language Annals*, 1, 131-151.
- Chickering, A. & Reisser, L. (1993). *Education and Identity*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Chieffo, L. & Griffiths, L. (2004). Large-scale assessment of student attitudes after a short-term study abroad program. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 10, 165-177.
- Clarke, I., Flaherty, T. B., Wright, N. D., & McMillen, R. M. (2009). Student intercultural proficiency from study abroad programs. *Journal of Marketing Education*, 20 (10), 1-9.
- Cushner, K. & Karim, A. (2004). Study Abroad at the University Level. In J. B. Dan Landis & M. Bennet (Eds.), *Handbook of Intercultural Training* (3rd ed., pp.289-308). Thousand Oaks: Sage Publishing.
- Deardorff, D. (2008). Intercultural Competence: A Definition, Model, and Implications for Education Abroad. In V. Savicki (Ed.), *Developing Intercultural Competence and Transformation* (pp.32-52). Sterling: Stylus Publishing.
- Engle, L., and Engle, J. (2004). Assessing Language Acquisition and Intercultural Sensitivity Development in Relation to Study Abroad Program Design. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, Volume X, Fall, 219-236.
- Evans, N. J. (2003). Psychological, Cognitive, and Typological Perspectives on Student Development. In S. R. Komives, J. Dudley, B. Woodard, & Associates (Eds.), *Student Services: A Handbook for the Profession* (4th ed., pp. 179-202). San Francisco: Jossey-Bass.
- Fuller, T. L. (2007). Study abroad experiences and intercultural sensitivity among graduate theological students: A preliminary and exploratory investigation. *Christian Higher Education*, 6, 321-332.
- Hammer, M. R. and Bennett, M. J. (2002). *The Intercultural Development Inventory (IDI) Manual*. Portland, OR: Intercultural Communication Institute.
- Hashimoto, H., & Kudo, K. (2010). Investment matters: Supremacy of English and (re) construction of identity in international exchange. *Language and Intercultural Communication*. 10 (4), 373-387.
- Hoff, J. (2008). Growth and Transformation Outcomes in International Education. In V. Savicki (Ed.), *Developing Intercultural Competence and Transformation* (pp.53-73). Sterling: Stylus

Publishing

- Holliday, A. (2011). *Intercultural communication and ideology*. Los Angeles, CA: Sage.
- Isabelli, C. A., and Nishida, C. (2005). Development of Spanish subjunctive in a nine-month study-abroad setting. In *Selected proceedings of the 6th conference on the acquisition of Spanish and Portuguese as first and second languages* (pp.78-79). Somerville, MA: Cascakilla.
- 苅谷剛彦 (1998) 『変わる日本の大学：改革から迷走か』 玉川大学出版部
 経済産業省・文部科学省編『産学人材育成パートナーシップ グローバル人材育成委員会報告書』
 (2010年4月23日)
- Kelly, G. (1963). *A Theory of Personality*. New York: Norton.
- 木村啓子 (2006) 「英語圏滞在学生の英語力に及ぼす影響：短期語学研修により英語力は向上するか」『尚美学園大学総合政策研究紀要』12、1-20
- 小林敏彦 (1999) 「海外短期語学研修で英語力はどのくらい伸びるものか」『小樽商科大学 人文研究』97、83-100
- 小林文生 (2013) 「短期海外研修による教育的効果の再検討：学生の報告書の多面的な分析を通して」一橋大学『人文・自然研究』7、162-185
- 小林康夫 (1998) 「大学教育の意味を再考する：大学で何を学ぶか」佐伯眸、黒崎勲、佐藤学、田中孝彦、浜田壽美男、藤田英典 (編) 『変貌する高等教育』岩波書店 pp.315-330
- Koester, J., Wiseman, R.L., & Sanders, J. A. (1993). Multiple perspectives of intercultural communication competence. In R. L. Wiseman & J. Koester (eds.) *Intercultural communication competence* (pp.3-15). Newbury Park, CA: Sage.
- 厚生労働省「雇用政策研究会報告書」(2012年8月)
- 工藤和宏 (2009) 「日本の大学生に対する短期海外語学研修の教育的効果—グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく一考察」『スピーチ・コミュニケーション教育』
- Kudo, K., Motohashi, Y., Enomoto, Y., Kataoka, Y., & Yajima, Y. (2011). Bridging differences through dialogue: Preliminary findings of the outcomes of the Human Library in a university setting. *Proceedings of the 2011 Shanghai International Conference on Social Science (SICSS)* [CD-Rom]. Retrieved 9 October 2011 from the Human Library website: <http://humanlibrary.org/paper-from-dokkyo-university-japan.html>.
- Lafford, B. (1995). Getting into, through and out of a situation: A comparison of communicative strategies used by students studying Spanish abroad and 'at home'. In B. R. Freed (Ed.), *Second Language Acquisition in a Study Abroad Context* (pp. 97-122). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Co.
- Lafford, B., and Collentine, J. (2006). The effects of study abroad and classroom contexts on the acquisition of Spanish as a second language: From Research to Application. In Salaberry, Rafael & Lafford, Barbara A, (eds.) *The Arts of Teaching Spanish: Second Language Acquisition from Research to Praxis* (pp.103-126). Washington D.C.: Georgetown University Press.
- Lamet, M. & Bolen, M. (2005). Education Abroad in the Campus Context. In J. L. Brockington, W. W. Hoffa & P. C. Martin (Eds.), *NAFSA's Guide to Education Abroad for Advisors and Administrators* (3rd ed., pp. 61-74). Washington, DC: NAFSA: Association of International Educators.
- Martin, J. N. (1993). Intercultural communication competence: A review. In R. L. Wiseman & J.

- Koester (Eds.) *Intercultural communication competence* (pp.16-29). Newbury Park, CA: Sage.
- 文部科学省 産学連携によるグローバル人材育成推進会議「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」(2011年4月28日)
- 内閣府「青年国際交流事業の効果測定・評価に関する検討会 中間報告」(2012年8月)
- 野中辰也(2005)「海外語学研修の効果測定」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』35、7-12
- 野中辰也、田中ゆき子、隅田朗彦(2002)「短期語学研修プログラムの効果測定(2)」『新潟青陵女子短期大学研究報告』32、33-38
- 野中辰也、田中ゆき子、隅田朗彦(2001)「短期語学研修プログラムの効果測定(1)」『新潟青陵女子短期大学研究報告』31、71-78
- 沼本健二、黒田ディアナ、北川歳昭、上斗晶代、福森護(1991)「ホームステイの英語力への効果 III」『中国短期大学紀要』22、227-242
- 沼本健二、上斗晶代(1990)「ホームステイの英語力への効果 II」『中国短期大学紀要』21、135-142
- Olson, C. L., & Kroeger, K. R. (2001). Global competency and intercultural sensitivity. *Journal of Studies in International Educations*, 5, 116-137.
- Paige, R. M., Cohen, A.D. and Shively, R. L. (2004). Assessing the impact of a strategies-based curriculum on language and culture learning abroad. *Frontiers: The interdisciplinary Journal of Study Abroad*, Volume X, Fall, 253-276,
- Patterson, P. (2006). Effect of Study Abroad in Intercultural Sensitivity, Unpublished Doctoral Dissertation. University of Missouri-Columbia.
- Pedersen, P. J. (2009). Teaching towards an ethnorelative worldview through psychology study abroad. *Intercultural Education*, Vol.20,73-86.
- Ruben, B. D. (1989). The study of cross-cultural competence: Traditions and contemporary issues. *International Journal of Intercultural Relations*, 13 (3), 229-240.
- 首相官邸編「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」(2011年6月22日)
- 田浦秀幸、堀井耕太郎、馬西卓徳、岡田宏子、清水大介、柏本恵未、戸成辰也(2009)「ニュージーランド短期英語研修の効果に関する一考察」『大阪府立大学人間社会科学部言語文化学科言語文化学研究(言語情報編)』4、1-22
- 上斗晶代、沼本健二(1989)「ホームステイの英語力への効果 I」『中国短期大学紀要』20、165-177
- Williams, T. R. (2005). Exploring the impact of study abroad on students' intercultural communication skills: Adaptability and sensitivity. *Journal of Studies in International Education*, 9, 356-371.
- 山岸みどり(1995)「異文化間能力とその育成」、渡辺文夫(編著)『異文化接触の心理学』、201-223、川島書店
- 山岸みどり(1997)「異文化間リテラシーと異文化間能力」、『異文化間教育』Vol.11、37-51、異文化間教育学会